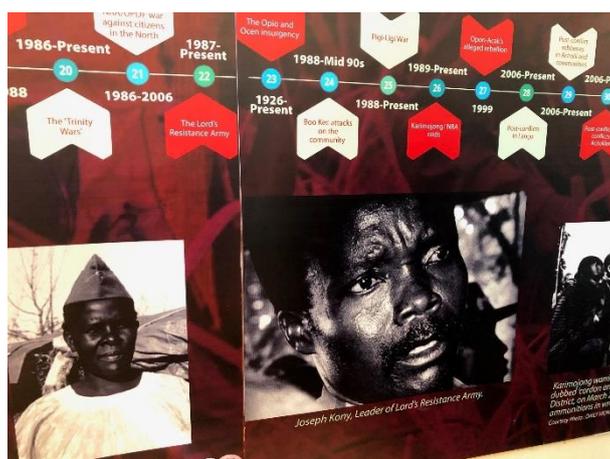


カンパラ通信～ナカセロの丘から

第38回 ウガンダの「ダークツーリズム」によるこそ

ウガンダは、1962年の独立直後から指導者相互の争いで国内混乱に陥り、そんな時代が1986年まで続きました。同年1月になってそんな混乱したウガンダの内戦状態に終止符を打って国内を平定し安定を取り戻したのがムセベニ大統領です。彼は現在も現役のウガンダ大統領です。しかし、全土の安定という訳ではなく、例外がありました。それがウガンダ北部でした。北部地域の中でもその中央に位置しているアチョリ準地域が、それまでの歴史的経緯もあってムセベニ政権に対する反発心が特に強いところでした。そのため、北部住民の間では新たに誕生したムセベニ政権に反抗する機運が高まり、当初はアリス・ラクウエナ、次いでジョセフ・コニーが指導者となった「神の抵抗軍」(詳細は後述)の反政府運動が続きしました。当初は地元住民から彼らの行動を支持したり、シンパシーを抱いたりする者が少なくありませんでした。しかし、自発的に立ちあがって一緒になって銃をとる者があまりいなかったのか、食料を徴発したり兵士を補充するために若者を誘拐したり略奪行為に手を染めるようになりました。こうしてジョセフ・コニーが指揮する抵抗運動は地元の民族であるアチョリ人を含めウガンダ北部の住民には受け入れられず、孤立して行ってむしろ彼らを敵に回す方向へと向かいました。そして、反政府運動の「神の抵抗軍」は2005年までウガンダ北部各地を襲い、住民を殺害し、若い男女を拉致し少年兵に仕立てたり、自らの兵士の性に奉仕させたりしていました。その結果、「神の抵抗軍」は地域住民を恐怖に陥れ、多い時でウガンダ北部の150万人から200万人の住民が国内避難民キャンプでの生活を余儀なくさせられたと言います。



(キットグムの平和文献センターに掲示されているコニー司令官の写真)

今、巷には「ダークツーリズム」という言葉が知られるようになってきていると聞いており

ます。災害被災跡地、戦争跡地など、悲劇・死・暴虐にまつわる場所を訪問する観光のことを指すそうです。旅行全般を専門的に扱うウェブサイトのトリップアドバイザーによると、アウシュビッツ・ビルケナウ博物館を一番に挙げています。筆者は、先般このジョゼフ・コニーが生まれ育った地域を回る機会がありました。これは、さしずめウガンダのダークツーリズムだなと思いました。今回は、このウガンダのダークツーリズムに皆様をお誘い致します。

それでは、皆様をこの負のツアーにお連れする前に、旅の事前知識として知っておくべきジョゼフ・コニーと彼が率いた「神の抵抗軍 (Lord Resistance Army: 通称 L R A)」について説明させてください。まずはウガンダ北部がムセベニ政権を受け入れようとしなかった歴史的背景から始めましょう。北部ウガンダの主要民族であるアチョリ族は、ナイル系部族グループに属し、16世紀頃に現在の南スーダンのナイル流域から周辺の地域に移住して広がり、その一部が現在のウガンダ北部に移り住んだと考えられています。ウガンダ中央部から南部にかけて住む人々はバンツー系民族とは人種的に違った系統で、そのため言語構造も異なり、お互いの言葉で意思疎通はできません。そんな違った民族が一つの国の中に入ったのは、この地域を保護国化した英国の統治に起因しています。当時英国はバンツ一族のブガンダ王国を利用する形でウガンダを統治していました。ブガンダ王国は、英国に利用されていると気付きながらも民族・部族的に異なるアチョリ族を含むウガンダ北部を差別扱いし、彼の地の教育レベルの低さ故か単純労働者として雇うか、多くの人を軍に入れ兵士として雇用しました。英国もブガンダ王国の蛮行を黙認していたのでしょう。軍事独裁者であったアミン大統領も北部ウガンダ北西部の西ナイル準地域の出身で中央スーダン系のカクワ族に属した人でした。大統領時代に多くのアチョリ族住民を虐殺したと言われています。こういった歴史的な経緯があって、アチョリ族の住民の間では新たに誕生したムセベニ政権に反抗する機運が高まり、当初はアリス・ラクウェナ、次いでジョゼフ・コニーが反政府組織「神の抵抗軍」の指導者となって登場しました。アリス・ラクウェナは、精霊により悪とされるムセベニ政権軍と戦うカルト的な精霊運動を指導し、ムセベニ軍により敗れたアチョリの軍兵士に対して自らに従うものは精霊に守られて銃弾を受けても命を失わないと督励しカンパラに向かって進軍しました。しかし、1987年11月にジンジャ（首都カンパラから東部に約80km）付近の戦いで壊滅的に敗れ、ラクウェナ自身はケニアに逃亡しました。この空白を埋めたのがジョゼフ・コニーでした。コニーはやはり精霊により霊的な能力を身につけたとし、モーゼの十戒に基づく政府を打ち立てるとキリスト教的な要素をアチョリの伝統的な要素と組み合わせて霊的な預言でアチョリ民族を解放するといった抵抗運動を開始し、自らの武装兵を「神の抵抗軍 (Lord Resistance Army : L R A)」と名付けました。また、自らをアリス・ラクウェナの精霊運動を継承するものと宣言しました。当初は、政府軍と戦っていましたが、1992年からは北部地域の民間人を攻撃するようになりました。コニー司令官は、自らの武装勢力に新たな人員を補充することもままならず、地域の

地元民からの支援も得られなくなり、子供たちを拉致して男子を少年兵に仕立て、女子たちを兵士の妻にするなど性的に搾取しました。これらの少年兵が逃げ出して村に帰れないようにするために自分たちの親兄弟・姉妹を鉈で殺すように仕向けたりしました。また、たまたま遭遇して行動の邪魔になった民間人にはその鼻や唇をそったり、腕など切り落としたりしました。このようにLRAが少年少女を含む地元アチョリの民間人を拉致して兵士に仕立て上げるようになったことから、ますます地元のアチョリ族もLRAから距離を置くようになりました。そうなる悪循環でLRAはますますアチョリ族住民に対して上記のような残虐な行為を繰り返し働くようになったのです。

ウガンダ政府は、北部ウガンダの住民の安全を確保するために国内避難民キャンプ（IDPキャンプ）を北部地域各地に設立し、住民は昼間は畑仕事に出ますが、危険な夜間は政府軍に警備されたIDPキャンプに避難して寝泊まりする生活となりました。1990年代半ば、ウガンダ政府は、イスラム勢力主導のスーダン政府に弾圧されているというスーダン国内の南部キリスト教勢力に同情して支援を開始します。それに対抗して、スーダン政府がLRAを軍事的に支援するようになりLRAの活動が強化されました。いわばウガンダとスーダンの代理戦争の様相を呈しました。しかし、ウガンダ政府軍の攻勢により次第にLRAはウガンダから拠点を南スーダンに移し、2005年から06年にかけてはコンゴ（民）北東部に難を逃れ、ウガンダ国内に危害を加える危険はなくなりました。同時期にウガンダ政府とLRAの間で和平交渉がもたれ、停戦が合意され和平協定がまとめられるに至りました。しかし、コニー司令官は予定されていた署名会場に現れませんでした。そのため、ウガンダは南スーダン自治政府軍及びコンゴ（民）軍と共同でLRAをせん滅する軍事作戦を敢行しましたが、LRAはさらに奥地の中央アフリカ共和国に逃げ込みました。コニー司令官は今も健在の趣でLRA兵士も数百名の小勢力ながら生き延びている状況が続いています。



（写真奥にコニーの生家があった由）



（コニーが通った Odek 小学校）

そんなジョセフ・コニーの生誕地を訪れる機会がありました。とある縁でウガンダ北部のグ

ル市でジョリー・グレイス・オコット女史と知り合い、2019年7月にグル市に出張した機会を捉えて彼女にジョセフ・コニーにゆかりのあるところを案内してもらったのです。オコット女史は、ジョセフ・コニーと同じくアチヨリ準地域のオデック村の出身でした。彼女が10代の1986年のある日全寮制学校から自宅に向かう道を歩いているところにジョセフ・コニー率いる抵抗軍兵士と遭遇し、その場で彼女は拉致されました。その後2年間LRAの下で下働きをさせられましたが、隙を見て逃げ出すことに成功したという女性です。彼女は、この紛争の犠牲となったアチヨリ人女性に裁縫の職業訓練を施し、自立した生活を送ることができることを手助けしてきています。

オコット女史は、アチヨリの小学校の児童がウガンダの全国音楽大会に出場することを描いた映画「ウォー・ダンス」(カンパラ通信第9回「映画の中のウガンダ」の中で紹介しています。)に出演しています。この映画は、ドキュメンタリーとされていますが、オコット女史の役はカンパラ来た音楽教師でしたので、この部分に関してはフィクションになります。オコット女史は、現在はオモロ県に属するコニー司令官が生まれたオデック村に連れて行ってくれました。そこで、コニー司令官が通った小学校、コニー司令官が瞑想し精霊の力を得たというアウェレの丘、コニー司令官の命令に従ってLRAに加わらなかった地元民約50人を虐殺した場所を訪れました。コニー司令官の生家は車両が通行できる道路から遠く離れたところにあるということでしたので、「あっちの方向にある森の付近の家だ」という説明を受けただけで、訪れることはできませんでした。コニーの子供時代のことについては、よくわかっておりません。生まれた年も1961年という記述するものもありますが、60年代の初めころという以上ははっきりしておりません。小学校を終えないで、神の啓示を受け精霊に導かれて抵抗運動に手を染めていったということになっています。



(精霊の丘)



(コニーが故郷の住民を虐殺した碑)

全世界的に見ますと少年兵の存在は、冷戦崩壊後の第三世界における民族紛争において、主に反政府組織によって子供が自らはもちろんのこと親の意に反して奴隷のように兵士とし

て使われるようになっていたことが問題となり、国際機関や民間のシンクタンクで取り上げられるようになりました。その中でもよく取り上げられたのがウガンダでLRAにより年少者を拉致し兵士に仕立てていたことでした。このようなことからLRAのことは日本でも紛争予防や平和構築を研究する研究者にはよく知られております。日本の大学生がウガンダへのスタディ・ツアーに参加してやって来ていますが、この少年兵問題に関心を持って参加する学生も少なくありません。また、日本のNGOである「テラ・ルネッサンス」は、2005年からウガンダ北部の中心都市のグルに駐在スタッフ派遣を開始し、元少年兵に対する社会復帰プロジェクトを行ってきております。これまでに約200名の元子ども兵の社会復帰を促進し元少年兵のウガンダ国内の受入家族1,000名以上への生活支援を実施してきています。そして多くの日本人の皆様がこの「テラ・ルネッサンス」の活動を応援・支援することを通じてこの問題に関心を持つようになったと聞いております。

今は平和なウガンダですが、つい比較的最近まで反政府勢力が跋扈し多くの住民がキャンプで寝泊まりしなければならない時代があったこと、しかも反政府勢力の首領コニー司令官は今も健在でLRA兵士も数百名の小勢力ながら生き延びていると言う事実。そしてLRAの元少年兵であったと深いトラウマに苦しむ男性、兵士達の性的搾取を余儀なくされた女性、例え郷里の街に戻ってもLRAに言われるままに家族を殺害したことで仲間外れにされたり勉学の機会も奪われ大人になってウガンダに帰って来ても社会に受け入れられず社会復帰ができないでいる者が依然として多くいることを忘れてはならないと思います。

とても悲しいウガンダ北部のダークツーリズムは如何だったでしょうか。

(了)